

アリと キリギリスと 隕石



黒犬ちわわ

夏の間中、好きな歌を歌うだけの暮らしをしていたキリギリス。

冬になると食べ物がなくなって困りました。通りがかった家のドアを叩きました。

出てきたのはアリです。うさんくさそうにキリギリスを見えています。

「アリさん。善良なるアリさん。どうかこの惨めな私に食べ物を恵んでやってくださいまし」

「ははあ。すると君は冬に備えなかったのかい。少し先のことも予想できない、その時楽しければいい。そんな考えで生きてきたのだね。そんな君を助ける必要がどこにある？」

アリの家の中からは暖かい光がこぼれ、食べ物のいい匂いが漂ってきます。その光を遮るようにアリは仁王立ちをし、寒い外で弱々しげに立つキリギリスを睨みつけます。

「自己責任という言葉を知っているかい。僕は夏の間も、春の間も秋の間もずっと働いてきた。毎日苦しい思いをしながらね。そのおかげで今があるんだ。寒い冬でも幸せに暮らせる。しかしそんな日だって束の間だ。また忙しい毎日が始まる。どうかこの僕のささやかな幸せを奪わないでくれ。君みたいな身勝手な者に僕の時間を奪われたくない」

アリがドアを閉めそうになったので、キリギリスは必死に哀れみの声をあげました。

「ああ、アリさん。あなたは可哀想な人です。時間の使い方を知っていらっしやらない。贅沢を知らない。そんなに切り詰めた生活をしていたら、毎日がおつらいでしょう。自分の時間を少しだけ人のために使ってあげる。それが本当の贅沢です。マザー・テレサも言っています。すぐそばで悲しんでいる人がいたら、自分の幸せもないと。どうか、そこにある食べ物から少しでいいので分けて下さい。それであなたも私も幸せになれるのです」

アリは顔から血の気が引いたかと思うと、次は真っ赤になり、紫になると目をぎょろぎょろさせ、やがて頭を勢いよく振ると無言のままドアを閉めてしまいました。

日はまたたく間に過ぎ、一年経ち二年経ち、アリは変わらぬ生活を送っていました。働ける間に働き、仕事のない冬は休む。時計の針が規則正しく動くように、忍耐強く毎日を過ごしていました。

そして三年目の冬、天変地異が起きました。地球の気候は変わり、生態系は崩れ、たくさんの動物が死んでいきました。アリは家を失い、財産を全て失い、奇跡的に助か

った我が身だけで放浪していました。

アリはギリギリスとぼったり出くわしました。あの時のギリギリスでした。

ギリギリスは実に楽しそうに歌を歌い、楽器を奏で、道行く者達の注目を集めていました。足を止め聴き入っている者達の顔は、この悲惨な現実を忘れ、喜びに満ちているようでした。涙を流している者さえいました。

アリは我を忘れ、ギリギリスに躍りかかりました。

「なんで君はそんなに楽しそうなんだ。あの時死んだんじゃないのか？ 君みたいな奴が生き延び、僕のように堅実に生きてきた者が酷い目にあう。世の中は狂っている。返して欲しい、僕が苦勞して働いてきた時間を返して欲しい」

ギリギリスはあの時と同じ、哀れむ声を出しました。

「アリさん、あなたはいいアリさんです。頑張っって今を生きています。私の歌を聴いて元気を出してください」

「歌なんか、くだらない。食べ物をくれ」

「アリさん。あなたがあの時、ドアを閉じた後、私はもう死ぬと思いました。どうせどこも同じなのだと思いながらも、あと一軒、別の家のドアを叩きました。すると、その家の主人は、私に食べ物を恵んでくれたのです。その時の喜びと感謝の気持ちは忘れられません。その時の主人は、今、どこでどうしているか……。その主人への恩返しのつもりで、ここで道行く人達に歌を歌っているのです。みんなに幸せを分けてあげたいのです」

ギリギリスは歌い始めました。周りから拍手が起こります。アリは立場がなくなったように感じ、そこから走り去りました。

夜になり、アリは再びその場所へと戻りました。ギリギリスが穏やかな顔で眠っていました。誰かから貰ったのか、暖かそうな毛布をまいています。昼間と違って辺りには誰もいません。

アリは近くに転がっていた大きな石を持ち上げると、ギリギリスの頭の上へと落としました。悲鳴もあがらず、辺りは静かなままでした。アリはギリギリスの死体をぼりぼり食べ始めました。

「こうして、君は僕のお役にたてるんだ。感謝したまえ……」

遠くで火の柱があがるのが見えました。噴火です。連なる山の頂から、次々とマグマが吹きあがりました。

赤々と燃え上がる空に、流星群が見えました。その一つの隕石が、次第に大きくなり、こちらの方へと向かってくるようでした。

どうして。どうして。どうして。どうして。

アリはギリギリスの死体を一心に食べ続けながら、世の不条理を呪いました。

アリとキリギリスと隕石

<http://p.booklog.jp/book/79216>

著者：黒犬ちわわ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/bwolf/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79216>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79216>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ